

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本文化と生け花
Author(s)	パイ, チトラ ビビック
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 22期 : 9 - 19
Issue Date	2008-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038814
Right	
Relation	



日本文化と生け花

パイ・チトラ・ビビック

0. はじめに

生け花は、いまやたいへんなブームだ。ブームというのは一時期、花火のようにパッと花咲いてしぼんいくもののようにいわれているが、生け花が、日本の伝統芸術として発祥したのは、今から約六百年前のことで、それ以来、様々な変遷を重ねながら、その時代の非常生活に密着し、人びとに親しまれながら発展してきた動かしがたい、“実績”があるからだ。

生け花は、いつの時代にもおケイコごととしてとられたり、生活芸術として追求されたりと、さまざまだった。しかも老若男女のわけへだてなく、人びとはハサミと花を握ってみたいと思うときに、生け花をいけたのだ。生け花が長い年月、すたれることがなかったのは、人びとのそういった素朴な花を愛する心に支えられているのも確かな事実だ。

そういったことを反映して、現在の日本のいけばなの流派は、約三千流派、人口も三千万人という膨大な数を誇っており、ますます発展している。

1. 生け花とは

「生け花とは何ですか？」と問われて、即座に答えられる人がいったいどれほどいるだろう。「花器に花をさすのを生け花というのよ」とおっしゃるかもしれない。しかし、約六百年の歴史と伝統をもつ、日本の生け花はそのような単純な言葉で表せない“性格”を持っているのだ。

今生け花と呼んだが、その名称についても、数多くの呼び名があってどれがほんとうな呼称なのか、迷ってしまう。「いけばな」という名称は、江戸時代から用いられたものだ。この時代の新しいいけばなの様式に「生花」というのがあった。が、生花を訓読みで「いけばな」とも言った。これは花を生命あるものとして生かして飾る、という意味でもあるわけで、「生花」といけばなに違いはない。

いけばなの初期といわれる十五世紀ごろは「たてばな」といわれていたが、それが室町時代に、ひとつの完成された型を生みだしたところで「立花」と呼ばれるようになった。この時代のいけばなは、立花のことだったのだ。

それから桃山時代にかけて、いまの茶の湯が流行し始めるのだが、茶室の花（茶花という）が創案されると、「花」とも呼ばれ、今でいうところの「お花」はここから始まっている。

2. 生け花の歴史

生け花の歴史は文献によってたどっていくと、明確な姿(様式)を持つのは、室町時代(十

五世紀)以後ということになる。しかし、その前に、日本人のいろんな花との接触があったことが記録にある。それが土壌となって室町時代に鑑賞される“花”としてひとつの形をとって現れたのが生け花と見るのが妥当なようだ。

古くは「万葉集」に見られるが、生け花の原型を求めるとすれば「供花」、つまり、仏前供養の花として見ることができる。しかし、それだけなら東洋の仏教国と同じく、供花は供花の形のままとどまっていたはずだ。

それが生け花に発展したのは、やはりそこに日本人独特の花との触れ合いの仕方があったからだ。

3. 現代の生け花の実情

現在、生け花界の人口は約二千万人とも三千万人ともいわれている。それほど、数えきれない人たちが生け花に親しんでいるのだ。そして、生け花の流派は全国に約三千流派といわれているが、人口の増加とともに、実数のつかめないのが実情だ。

実数がかめなくても、職場や学校での生け花は盛んだし、町のいたるところに教場も林立している。そして、かつて女性のおケイコごとといわれた生け花が単なる女性の花嫁修業というイメージを打ち破り、社会的にも認められる立派な職業になった。こういった傾向を、生け花界の人たちはうれしい傾向だと見ているが、確かにその通りだといえよう。つまり、それは生け花にたづさわることが単なる遊びごとではない、という証拠だからだ。この傾向はますます強くなると思われる。

今、職場では、花嫁修業のひとつにしかとらえていないが、高校や大学では、課外活動から正課に取り入れる学校も出てきている。それも、生け花人口をより大きくすることになるわけだが、すでに学校法人として授業をおこなっているところもある。

約六百年の伝統を持つ生け花がさまざまな変遷をたどりながら、今日は、われわれの日常生活に密着し、生活の中になくはならないものとなっている。これは1955年ごろから経済の著しい成長によって一般の生活が向上するにともない、生活を便利に、快適に楽しむ雰囲気がいよいよ濃くなってくると、生け花も生活と結びついていっそう関心が高まってきた結果といえる。

すでに、そのころ、生け花は“床の間”を抜け出し、暮らしの中の生け花として“茶の間”で楽しむ生け花となる傾向にあった。つまり、生け花は床の間のものというイメージが、生活様式の近代化に伴い、2DKや1DKの中に飾る生け花と変わってきたわけだ。そして、経済の好況が日常生活を豊かにし、生け花を趣味として習う人が増え始めた。

ことに、1964年の東京オリンピックは、生け花を内外ともに飛躍的に発展させた。それはオリンピックによって、世界の目が日本へ向けられ、日本の文化、芸術まで注目された結果といえる。

生け花の近代化に伴い、外国人の生け花熱は大変なもので、海外進出は著しいものがあった。ことに1956年、「イケバナインターナショナル」という世界の婦人たちが生け花で手

を結ぶ会が結成され、それまでフラワー・アレンジメントなどと呼ばれていた生け花は“いけばな”として世界に知られるようになった。

4. 季節の生け花

花の取り合わせ

花の取り合わせというのは、季節ごとに咲く花を、いろいろに組み合わせて、つくり出される面白さ、楽しさを味わうものだ。俳句が五―七―五の言葉の組み合わせでやるのと全く同じように花の組み合わせによって季節感を表現したり、ドラマをつくりあげたりすることができる。

花の取り合わせというものは、どこの流派でも決まりのあるものではない。だからといって、ただ何種類かの花を適当に、二つ、三つと組み合わせてもいいというものでもない。取り合わせを決めるには、この花に何の花を加えてみようかと考えることから始める。どんな花をいけようか、どんな花を飾ろうかと考えることが、取り合わせて美しく表現することにつながる。

春の生け花

早春の花は素朴で、春の盛りの花はみずみずしく、晩春の花はあでやかである。草木は非常に季節に敏感である。枯れた草の下に緑を見つけると、春がきたのだとしみじみ思う。こうした草花の生命のいとなみに感動する心が、花を生ける主要な目的となる。寒風も雪も知らない春の草花は、陽春の光に恵まれてすこやかに育だつ。その素朴で新鮮な印象はいかにも、春は希望にあふれているといった感じがする。明るい色には夢のような雰囲気があり、時には苦難を知らないはかなさがかくされている。

こうした春のムードは、形式にこだわらない構成によって表される。感触の柔らかさと、薄く白っぽいさわやかな色に包まれた全体の構成に、暖かく明るい春の色が配されます。春の生け花は春が来た感じを表すように花を生ける。

夏の生け花

さわやかな初夏がすぎれば焦熱の夏が訪れる。水と緑のある陰に行きたくなる季節です。強烈な太陽に耐えて草は花をつけ、木々は枝をしげらせる。酷暑にあえぐ眼に花はさわやかに見え、緑は心をやすませてくれる。時には強烈な日のもとに燃えるような花を開く植物もあるが、夏の生活にとって必要なのはさわやかさとやすらぎに満ちた生け花である。

夏の生け花は、単純な構成と明決な表現を持ち、涼しさを誘い、さわやかさをもりあげるものです。

秋の生け花

秋には生命の実りが訪れる。草や木には染めたような彩りと、内に満ちる充実感が現れ

る。秋の生け花は、これらの草木のうえにやがて訪れる生命の転機に目をとどめながら、この秋の色を形の上にもりあげてゆく。

冬の生け花

冬の生け花は、春を心にみたしてさえている。冷たい大気の中にすでに春の気配が流れ、生命がひそやかに動き始める。草木のわびしい外観の中に、春の動きは一点に集められ、やがて明るく広がっていく。この一点に凝集された力が、やがて全体をおおう動きとなる構成を持つのが冬の生け花の姿勢である。

私は春の生け花しか生けたことがない。春は花がいっぱい咲く季節なので、春の生け花はいろいろな花を使い、いろいろな色の花を使って生ける。

このように季節によって花の生け方は違う。

5. 生け花に使う道具

生け花を生けるにはいろいろな道具を使う。花を挿す道具もかかせない。例えば、はさみ、花瓶、器、剣山などである。生け花を生けるときは大体この四つの道具を使う。

はさみ

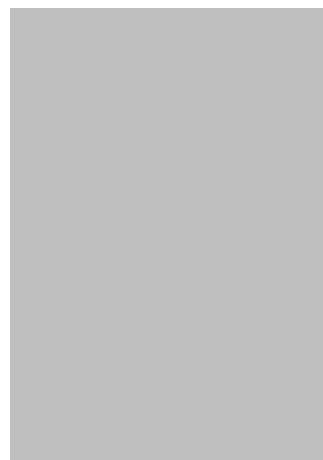
はさみは、余分な枝葉を切ったり、花の根元を切って茎の長さを調節する時に使う。

根元の切り方は花材の種類や花留めの方法によって異なるが、多くの場合、斜め切りにする。これは花材を花器の内側や剣山（けんざん）に固定しやすくし、花材が水を吸いやすくするためだ。



花瓶（かびん）

花を生けるときに使う、縦に細長い花びんだ。花材には横木をして、花びんの内側3か所で固定する。このような花瓶は平缶（生け花の一種類）を生けるとき使う。



器（うつわ）

花瓶とともにこのような器に花を生けることもある。大体盛り花(生け花の一種類)を生けるときは、このような平たい器を使う。花材を固定させるために剣山と一緒に使う。



剣山（けんざん）

盛り花を生けるときの道具で、長さ1センチくらいの針が一面についている。

この針に花材を刺して固定する。右の剣山には針がついているが、針がついていない剣山も使われている。左の花器にある丸いものも剣山だ。



両方とも
剣山だが。

形が違う。右の剣山は太い枝などを挿すのに便利で、左の針がついていない剣山はそのあいている穴に花を挿す。



6. 生け花の流派、種類

生け花はただ花を挿すだけではなく、決まった形に花を挿す。そして、生け花にはいろんな流派があり、“池坊”とか“小原”という家元がる。生け花を習う人々は池坊とか小原の流儀を教わり、その教えのとおり生けるのだ。流派ごとにそれぞれ生け方が違っており、私が習ったのは池坊流の生け方だ。

生け花は決まった形に生けるのだが、決まった形にするために、生ける時にそれぞれの花の長さを考えて切る。決まった形としては、「天」が最も上に生ける花、「地」が最も下に生ける花、そして、「人」が天と地の間に生ける花だ。決まった形に生けると、次の写真のようになる。



生け花にはいろんな種類があるが、おもなものは次の三つだ。

- 1) 盛り花
- 2) 平花
- 3) 荘厳花

盛り花（もりばな）

盛り花は平たい器と、花材を刺す針が付いた剣山（けんざん）を使って生ける技法だ。平面的な広がりを持つように生け、花を盛り合わせることによって自然のたたずまいや花の美しさを再現する。盛り花を生けるときは、緑を多く使い、そこにいろんな花をいける。盛り花は自然の様子を表す。木がいっぱいあり、花がたくさん咲いている様子である。盛り花では水のあることがとてもよいと言われている。水は川の流れを表す。

盛り花は明治時代になって生まれ、花材も西洋の草花も用いて自由に生けることができる。飾る場所も日本建築の床の間だけでなく、洋間や玄関などにも飾られるようになった。盛り花は大体写真にあるようにいける。



盛り花はこのように平たい器を使う。この盛り花に使った花材は鉄砲ゆり、擬宝珠、スターチス、カーネーションだ。

また、盛り花にもいろんな種類がある。例えば

1) 右盛体 (うせいたい)

右盛体の「う」は右という漢字だ。つまり、この生け花は右の方に傾くという意味だ。右といっても、見ている人から見て右ではなく、花器から見て右に花を生ける。

右盛体の場合、木とか川の流れは右から左に流れている感じをあらわす。



2) 左盛体 (させいたい)

左盛体の「さ」は左という漢字で、写真のように、花を花器の左方面に生ける。

この場合、自然の流れが左から右に向かう感じを表すように生ける。



3) 立盛体 (りっせいたい)

立盛体の場合、漢字は「立つ」という漢字で、枝と花はまっすぐ立てて生ける。

この場合は生けている花の長さが大切になる。この生け方は自然の流れが後ろから前に向かうような感じに生ける。立盛体を生けるときはほとんど細長い花瓶を使う。

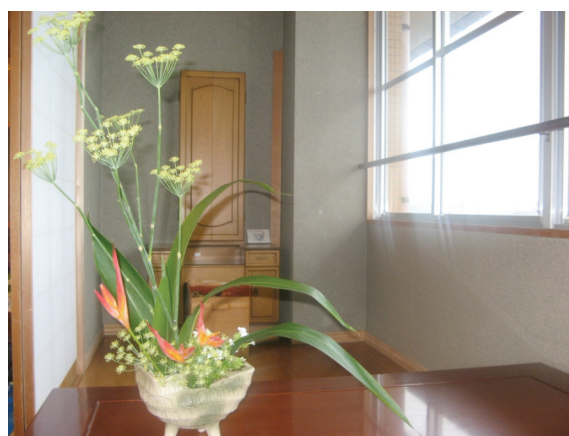
右の写真のようになる。



4) 飾盛体 (しょくせいたい)

飾盛体は自由スタイルとも言われている。飾盛体には決まった形もないし、守るべきルールもない。飾盛体という漢字のとおり、飾盛体は飾りものとして置く。

花材によって生け方が違う。写真のものはどんな感じがするだろうか。



平価（へいか）

平価は、細長い花瓶に花を縦長に生ける技法で、生け花の基本の一つだ。平価の一番の特徴は、自然の花の持っている感じを損ねずに、それを花瓶のなかに風流に再現するという姿勢だ。

口元のせばまった瓶や壺などの高さのある器を使って、挿し口の部分がすっきりと引きしまって見えるように生けることが大切だ。細長い花瓶に安定させるため、横木などの留め木を使って生ける。

平価の構成は、主枝（しゅし）、副枝（ふくし）、客枝（きやくし）の三つに別れ、それぞれの長さや挿す位置、角度の変化によってさらにいくつかの種類に分けられる。平価ではほとんどの場合、細長い花瓶を使い、花の枝を切らずに生ける。そのため花瓶の中で花を留める。花の留め方にも、前留（まえどめ）、横留（よこどめ）、向う留（むこうどめ）、見越留（みこしどめ）、藍留（あいどめ）、乱れ止（みだれどめ）などいろんな種類がある。



平価を生けるときは、大体細長い花瓶を使う。花の長さが大切であるが、平価を生けるとき、花を使わずに葉っぱだけを使う場合もある。そのとき普通の花瓶は使わず、花器を使います。右の写真のような感じになる。



平価にもいろんな種類があり、たとえば、三勝の景という三つの景がある。(高雄の景、嵐峡の景、挺湖の景)

平価には景色を花で表す生け方が七種ある。

- 1) 深山の取り方(しんざんのとりかた) — この生け方は山の奥深くに隠されているきれいな景色を表す。
- 2) 森林の取り方(しんりんのとりかた) — 森や林の多彩な彩りや形を表現する独特な取り方である。
- 3) 野辺の取り方(のべのとりかた) — 野原の野生的な美しさを表すのがこの取り方の特徴だ。
- 4) 池水の取り方(ちすいのとりかた) — この生け花は清い水のある池の景の感じがするように生ける。
- 5) 沼沢の取り方(しょうたくのとりかた) — この生け方は水辺や湿地の景色の感じがするように生ける。
- 6) 河川の取り方(かせんのとりかた) — 大きい河と小さい川の流れを表す生け方だ。
- 7) 海浜の取り方(かいひんのとりかた) — この生け花は浜辺の美しい風景の感じを与えるように生ける。

平価はこのようにいろんな種類の生け方を組み合わせる。

7. おわりに

生け花はいろんなところで見られる。昔は生け花は床の間におくものと考えられていたが、今日の生け花は、昔と違って畳敷きの部屋に飾ることはめったにない。昔はお寺などで、生け花の展覧会が開かれていたので、拝見法がきびしかったのだろう。今はそういった場所で開かれる展覧会とは別に、現代的にデパートやホール、茶室、台所や応接間などにも見られる。

生け花はいろいろな機会に置かれる。昔はそうではなかった。茶会や結婚式のときぐらいだったが、現代では家庭でもレストランでもよく見られる。花にまつわる行事としては「花とり踊り」、「花みこし」など数多くある。

このような行事は日本に限らず世界各地にある。ユリの花はキリスト教でも「復活祭」の花として使われ、その姿を神の復活と意味づけている。

普通の日本人に生け花を生けるかと聞けば、できないと答えるかもしれない。生け花は習わなければできなかつた。しかし、昔の日本人は今の若者と比べると生け花を生けることができる人はずっと多かつたそうだ。歴史的に有名などころには昔から生け花を教えて

いた流派があり、今日本には約3000もの流派がある。日本でもっとも有名な流派は「池坊（いけのぼう）」、「草月（そうげつ）」、「小原（おはら）」だが、「いちばん古い流派」は池坊で、その流派の学校は京都の六角堂寺にある。各流派により、生け方、花態（基本となる形態）などがすこしずつ異なる。

日本の文化としての生け花、インドはどうか？

日本では花を使ういろいろな飾り方があり、それを生け花という。花をきれいに並べるのだ。日本には生け花を教える特別な学校がある。それらの学校で教えている先生はみんなプロで、何十年も教えつづけている人もいる。生け花には花の並び方とか、枝のきり方とか、ルールがある。

インドにも花を飾る習慣はあるが、それだけでは生け花とはいえない。インドでは花を飾るための特別なルールはないし、花の飾り方を教える学校もない。結婚式のときとか祭りのときにはインドでも花をきれいに飾る習慣があるし、お見合いに行くときも花を持っていく習慣がある。花はみんな自分の好きなように束にするか、店の人に頼んで束にもらう。また、インドでは花をプレゼントすることがよくある。母の日、父の日、教師の日などである。

私がこのテーマを選んだのはインドには生け花がないからだ。せっかく日本にいたので生け花を習おうと思って華道のサークルに入って生け花を教えてもらった。そして、生け花の授業を受け、生け花がどんなものか分かってきた。授業では、いろんな種類の生け花を習った。日本人と一緒に花を生けたり、話したり、皆と一緒に料理を作ったりしたので、生け花だけではなく日本の伝統文化、習慣を味わうことができた。華道の授業では花の生け方だけではなく、日本のいろんな習慣を経験することができた。例えば、部屋に入るときの先生への挨拶の仕方（両手を床で合わせておじぎする）、花を生けるあいだ、ずっと正座をしているところが面白かった。そして、生け花を習い始めてから道ばたの花に眼を向けるようにもなった。

向こうでも生け花を習い、展覧会にも参加して腕を磨いていこうと思う。
以上。